資　料　３

山口県公立大学法人評価委員会（第４１回）の審議要旨

１　日　　時　　令和４年７月１４日（木）　１０：００～１２：００

２　場　　所　　山口県立大学北キャンパス３号館３階　Ｃ３０１教室

３　出席委員　　成富委員長、小野委員、首藤委員、早川委員（委員長以外５０音順）

４　審議事項　　１．令和３年度事業年度評価について
　　２．第３期中期目標期間終了時見込み評価について

５　審議要旨［ ● 委員　　◆ 委員長　　□ 法人　　△事務局］

● 県内就職率について。県外からの学生で県内に就職した学生はどれぐらいいるのか。県外から来た学生が、山口県の良さを感じて山口県で就職する、そういった意識を持つ学生がどれぐらいるのか。そういった取組にシフトしていく必要があるのではないか。

□ 昨年度の県内就職実績では、７割が県内出身者、３割が県外出身者となっている。山口県の魅力を伝える取組をさらに強化し、県内出身者だけではなく、県外出身者の県内定着に向けて頑張っていきたい。

● 県内高校出身者の割合について。県内高校出身者の割合が厳しい状況であることは理解しているが、県立大学の地域貢献という使命から考えると、県内高校出身者の割合は最低でも 50%は確保すべき。特に高校現場、あるいは県教委との連携というのが重要となる。その辺りの工夫が必要。

● 山口県高度産業人材確保事業の奨学金返還補助金について、県内の製造業等に就職することが補助要件とされているが、補助要件の対象とならない業種にとっては、IT 系人材の採用に苦慮する場面がある。県内企業への就職に向けて、県立大学の取組や県の施策でもう少し支えていただけないか。

△ 元々、県内製造業だけを補助対象としていたところを、情報サービス業についても範囲を広げたという経緯がある。大学の方でもデジタル人材の育成に取り組んでいくところであり、また、県の方でも、県内企業の IT 系人材のニーズを如何に満たしていくかという点は大事な視点であると考えるので、今後の課題として考えてまいりたい。

□ 看護師の例では、病院が独自の奨学金を準備して、県内の優秀な学生を繋ぎとめるということをされているところがある。また、元々山口県では、ものづくりを中心とした産業が中心だったということもあり、商業系や工業系の高校が多いという経緯がある。その流れの中

に、昨今、DX や IT というものが入り、本学においても文系 DX 人材を輩出するという目的で学部の再編を考えているところ。

● 女性が県内就職をして子どもを産むということは、どうしても仕事と育児を両立していかないといけない課題である。（女性の割合が多い）県立大学の学生に対して、命を繋ぐことや地域の文化を守っていくことの大切さなど、本質的な部分の教育をしてもらえないかと思っている。企業側もそれを理解して、もっと深いところでの共感ができる人が増えたら、と思う。

● 貸借対照表の未収金について、1 人除籍の学生がいるということだが、回収できる見込みがあるのか。

□ 当該学生に係る未収金については、訪問も含めて支払いの督促を行っているものの、ここ数年間、学生本人の行方が分からない状況。保証人や両親にも話をしているが、居場所が分からない状況。今年度末で時効が成立することとなるが、最後まで回収の努力は続けていく。

● DX 関係について。県自体がアナログなことをしていると感じており、県（や県立大学）がまず DX 化を進めなければ、民間でもなかなか進まないのではないか。（民間企業では）タイムカードを未だに手で記入して、手集計している事例がある。もっと効率よくできるのではと感じることもあるが、県立大学ではどのような状況なのか。

□ 勤退管理の部分については、県立大学でもシステム化できていない状況。時間外勤務の申請についても、システムではなくて紙ベースになっており、それは少なくとも電子化しないといけないと思っている。ただ、教員については、勤務時間帯が流動的なところがあり、それも電子化が進んでいない要因の一つ。

● 国際文化学部の県内就職の割合が極端に低いが、この理由は。英語のスキルを向上されているというところは素晴らしいことだが、山口県にとっての必要性、マッチングというのはどうなのか。また、DX というテーマを学部の再編にあたってどのように考えられているのかお伺いしたい。

□ 県内就職率について。令和元年はコロナ禍が始まった年であり、それ以前は来日外国人の数が非常に多かったため、英語力を上げよう、という教育をやっていた。県内企業でも国際力を学んだ学生、海外経験のある学生は一定の求人があった。コロナ禍以降は、来日外国人の数が減り、企業の方もニーズが薄れてきているのでは、と分析している。

□ 国際文化学部の再編について。昨年度行われた県の将来構想検討委員会の議論の中で、国際化の推進、DX の推進、社会福祉・看護等の充実、中高大の連携が（県立大学の）大きな使命となった。国際文化学部の活動についてはある程度の評価があったが、そこに DX とい

う課題が新たに立ち上がってきた。これまでの国際的な素養の部分に、情報等々を活用できるDX的な要素を加味し、これからの地域や時代の要請にかなう人材を育成することを目指して学部再編のプログラムを考えているところ。

◆　地域の大学として、地域と連携、共創、さらに進んで密着であるとか、もっと若い人に県立大学の良さを知ってもらうことが必要。例えば県立大学の教員が色々なところに足を運んで、膝を突き合わせて県立大学の活動をアピールしてはどうか。地域の共感を得られるような仕組みをどう創っていくかというところが課題。先ほど話に出たWell-being、文系DX、それらを県立大学モデルとしてどう作り上げるか。

●　これからの大学では、文系・理系ではなく、数理、AI リテラシー、データサイエンスといった分野は皆が学ばなければいけない、そういう方向性が出ていると思うが、当然、入試にも関わる話。次の第４期の計画も、そういう方向性で考えているということでよいか。

□　DX といった国策的な、あるいはトレンド的な要素も加味しながら、しかし一方では、高等教育機関として学問を究めていくこととのせめぎ合いがあるかと思う。本学が80年の歴史で培ってきたものを、時代の要請あるいは10年20年先の未来を見据え、さらに学問の本質とは何ぞやというところも加味して、文系DXというところが切り口となる。

●　県内高校出身者の割合について。当初の目標を60%にしていたが、今の状況では高すぎるのではないかと。まずは50%を次期の目標にして、それをしっかりクリアして、その先にまた別のアプローチがあるのかと感じている。

□　公立大学が増えているので、生徒の取り合いになるところもある。県唯一の県立大学として、どのように生徒を確保し、どのような人材を育成していくのか、他の公立大学が何を担うのか、というところも考えていかなければならない。本学のことだけを考えればよい、ということであれば、逆に施策が打ちやすいが、県唯一の県立大学としての使命というところも考えなければならない。県民から県立大学があってよかった、と言われるような大学にならないといけない。

□　この度、文部科学省のプロジェクトに応募して、県立大学、山口大学、学芸大学の３大学が同じ法人の中、傘に入ろうということで、経営は全然別にはなるが、教員の交流等はもっとやり易くなる。本学のように理系の教員が足りないところは山口大学から来てもらうことになる。これを成功させると県立大学に来たい、という生徒も増えてくると考えている。

●　物価高の影響はどうか。何か対策をされているか。

□　燃料費が上がっているのは確かで、危機感は感じている。電気使用量の節約には努めるが、一方で熱中症対策等、必要なものとして使用していかなければいけないものもある。（物価高等の）情勢が落ち着くことを願っているが、県立大学でも節約の仕方など研究もし

ていく。非効率な校舎配置にもなっているので、移転により効率化できる部分もある、と考えている。

● 教職員の働き甲斐に関係する評価項目では、概ね３点。教員が仕事を楽しめないと、学生のところにもいかないと思うが、何か特徴のある施策というか、（教員の実績等が）評価されるような仕組みはないのか。

□ 教員の数が、第３期の計画の中で非常に減っている。教員の数が減る一方でサービスの向上は求められるという話が多くある。教員がやりがいを持つためには、まず、数を増やすことが必要と考えている。管理職として声掛け等、メンタル的なフォローはしているが、実質的な仕事の量が多く、オーバーワークになっているので、県にも理解いただき、教員数の増ということを念頭に計画を立てさせていただきたい。

□ 第３期の計画で、常勤の教員が 97 人から 80 人に減っている。大学の戦略で人を充実させる必要がある。よくやっている人にはインセンティブを与える、ということが昨今では普通になっているので、県立大学でもそういったことをやっていくべき。県立大学では学生に寄り添った教育をしており、国立大学のような大きな大学ではそうはいかない。そこは県立大学の特徴なので、更にいいものにできれば。

● 是非、この辺りの指標が重点的に上がるように、具体的な計画にしていただけたらと思う。

◆ 全体的な流れとしては、概ねいい方向に向かっている感じがする。県立大学のコンセプトを凝縮したキーワード、それは何になるだろうか。

□ 教育では「地域力」、組織では「小規模大学ならではの細やかな関わり」というキーワードになるだろうか。

◆ 地域を主眼において、大学と地域がうまく回っていく仕組みをどう創っていくか、そこが要となる。今の教育体制をより充実させて、いい方向にいくようにされたら。

【 まとめ 】

◆ 各委員から多くの御意見をいただいたところであり、審議事項については次回への継続審議とする。

△ 今後、事務局において委員の意見を踏まえて評価書の素案を作成し、次回の評価委員会で審議をお願いしたいと考えているので、各委員の御協力をお願いする。

以　上